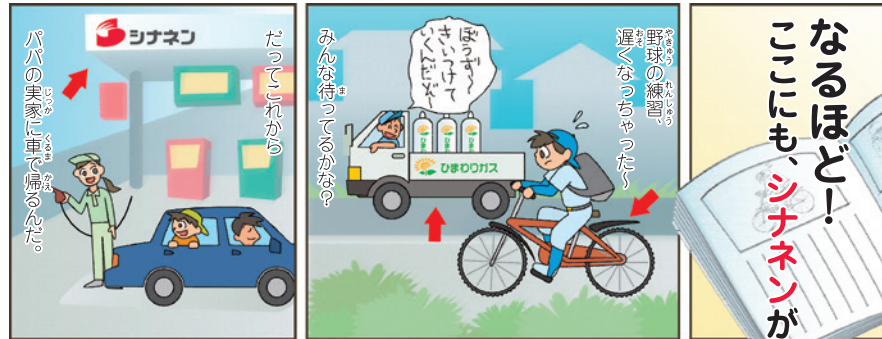


# いつもありがとう

## 第5回作文コンクール入賞作品集 2011

選者 あさのあつこ / 尼子騷兵衛 / 森田正光 / 鈴木弘行 / 下高原拓



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業



品川ハイネン株式会社

シナネングループ各社

いつもありがとう 第五回作文コンクール入賞作品集(2011) もくじ

最優秀賞

「大すきなおにいちちゃん」

田神 澁大

4

シナネン賞

「大きくてたくましい僕の大好きなお母さん」

小平 守莉

6

朝日小学生新聞賞

「おかあさん、ありがとう」

門畑 英菜乃

8

優秀賞

〈低学年の部3編〉

「おかあさん、ありがとう」

田平 遥飛

10

「ばあちゃんのやさしさにありがとう」

山中 寧々

11

「野さい作り名人のじいちちゃん」

中村 樹音

12

〈高学年の部3編〉

「背中洗い」

佐野 裕愛

13

「信じてる」

津志田 有花

14

「ふとんにつまった宝物」

南俊 太郎

15

入選

〈低学年の部7編〉

「ぼくのおとうさん」

安達 優人

16

「ぼくのらいばる」

吉野 秀

17

「宝物をありがとう」

砂川 正夢

18

「大すきなおとうさん」

牧 紗寧

19

「お父さんいつもありがとう」

齋藤 優奈

20

「お父さんパワーをありがとう」

富家 孝子 楼

21

「ぼくのジイジ」

熊谷 颯太

22

〈高学年の部7編〉

「ぼくのお父さん」

加来 眞

23

「父さんはヒーロー」

中村 桃子

24

「ねえちゃんの歌」

松田 わこ

25

「10年後のお母さんへの手紙」

三木 巴月

26

「まる子と友藏よ、永遠に」

安田 桃佳

27

「おじいちゃんと歩いた里山」

清水 晟志

28

「母の魔法に感謝をこめて」

渡部 優依 花

29

佳作

〈低学年の部10編〉

「だいすきなばあば」

高井 風佳

30

「おばあちゃんありがとう」

岡崎 諒

31

「いもうとができてわかったこと」

木田 泰陽

32

「ありがとうちみさん」

川畑 茉央

33

「大すきな、大すきなおかあさん」

迫田 妃花

34

「おとうさん、いつもありがとう」

山崎 慧史

35

「わたしのおばあちゃん」

若林 笑見

36

「かい星」

伊藤 瑠星

37

「さあちゃんのこと」

島田 結衣

38

「ぼくの兄弟ありがとう」

鴨田 克憲

39

〈高学年の部10編〉

「おかえり」

高田 野乃 夏

40

「大好きなお父さん」

平野 寿晃

41

「ジャンボおにぎりの不思議な力」

平木 優里

42

「おやじの味(いつもありがとう)」

岡田 賢心

43

「おじいちゃんの事故で気づいた事」

金村 理央

44

「白いうわぐつ」

細川 夕佳 里

45

選者あとがき . . . . . 50

あさのあつこ (作家)

尼子 驥兵衛 (漫画家)

森田 正光 (気象予報士)

鈴木 弘行 (シナネン株式会社代表取締役社長)

下高原 拓 (朝日小学生新聞)

主催・朝日小学生新聞社

共催・シナネングループ

後援・文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三三、三四二作品の中から選ばれました。

## 「大すきなおにいちゃん」

茨城県八千代町立西豊田小学校二年 田神 滉大

「おにいちゃん、いつしよにねよう。」「しようがないな。いいよ。」

ときどきほくはおにいちゃんのおふんにもぐりこむ。せまいベッドの中に、小さくなっていつしよにねむる。朝おきると、お母さんがいつもわらう。どうしてかっというとき、ほくが、ぐるぐるねているときに回てんして、さかさになっているから。たぶんねむりながら、おにいちゃんのことをけつとばしていると思う。でもおにいちゃんは、おこらない。おにいちゃんも「また、はんたいにねてたな。」「って言ってわらってくれる。

おにいちゃんは、ほくより10さいも年上。ほくが生まれたとき、とつてもうれしかったんだって。赤ちゃんだったほくを、ベビーカーにのせて、さんぼしたり、おもちゃをつかっただけをわらわせたり、よくめんどろをみてくれてたって、お母さんから聞いた。ほくが、ちよつと大きくなると、いつしよにおふろに入つて、からだをあらつてくれた。おとうさんは、毎日いそがしくて、かえりもおそいから、おにいちゃんは、小さなおとうさんみたい。

おにいちゃんは、やさしくて、ほくといつしよによくあそんでくれる。ほくがひとりでサッカーボールをけつていると「いつしよにやるか。」と言って、キックのしかたやドリブルのやりかたを教えてくれる。おにいちゃんは、サッカーぶに入つてからとつてもうまいんだ。いつしよにサッカーをするときは、ほくにあわせて、ちよつぴりやさしくボールをけつてくれる。つよくけると、ほくが、うまく足でボールを止められないと思つてるんだろ。うな。おにいちゃんのサッカーのし合を、おうえんに行くと、おにいちゃんのパスは、ほくとやつてるときとはちがつて、はやくてつよいから。あい手にまけないとひつしでボールをおいかけるおにいちゃんは、かっこいい。「がんばれ！いけ。」「おとうさん、お母さんといつしよに、ほくも大きな声でおうえんしちゃうんだ。ほくは、おにいちゃんがシユートするところを見るとわくわくしちゃう。「入れ。」「って、心の中でさけんじちゃうんだ。ほくも大きくなつたら、おにいちゃんみたいに、サッカーをやるんだ。「おにいちゃんが、家にいるのもあと少しだよ。」「つてお母さんが言った。大学に行くときから出てひとりですんだって。おにいちゃんといつしよにすこさい後のなつ休み。ほくは、いつばいつばいあそんでもらうんだ。おにいちゃんが大ききだから。」

## 大きくてたくましい僕の大好きなお母さん

山梨県山梨市立日下部小学校五年 小平 守莉

「この木は何百年もここにいてみんなを見守ってくれているんだね。」じいじの家の近くの神社の杉の木を見上げながらお父さんがそう言った。「うわー、太い幹だね。」僕の手では抱えきれない程、太くてたくましい幹に僕は抱きついたんだ。「まるでお母さんみたいだ。」僕はその太い幹に抱きつきながらそう思ったんだ。

僕のお母さんはかなり大きい。体も声も態度もすごく大きい。幼稚園の頃、その事をひやかした子がいた。「しゅりのお母さん、デープ。」って、僕はくやしかったんだ。だって、大好きなお母さんの事をバカにされても言い返す言葉が見つからなかったからだ。でも、お父さんが僕に言ったんだ。「お父さんはお母さんの大きな心も声もみんなひつくるめて好きなんだ。しゅりもそうだろう。」って、僕は大きな声で、「うん!。」って言ったんだ。

今はからかわれても平気なんだ。「いいだろう。お前のお母さんの二人分なんだ。」そう言うのとたいいていの友達が大笑いする。

授業参観、僕はお母さんがどこにいても見つけられるんだ。だって、お母さんからは僕の事が好き好きオーラがでているから、僕は授業中でもついつい手を振ってしまうんだ。だから決まってお母さんに怒られるんだ。「ちゃんと授業に集中しなさい。」って。きつと僕からお母さんの事が好き好きオーラが出ているんだろうな。

体力なしの根性無しの僕はすぐにあきらめたり、投げ出したりする。でも、そんな時はきまってお母さんが大声をはりあげて僕を叱りとばす。「男だろう!ちゃんとしろ!!」って。だから、僕はがんばれるんだ。そのくせ、僕にピンチがおとずれると必ず助けてくれるんだ。さ骨を骨折した時も、首の手術をした時も、お母さんはずっと僕を助けてくれたんだ。

「この木、お母さんみたいだね。」お父さんに言うと、お父さんは笑いながら「本当だ。いつもしゅりの事を見守ってる所も、大きい所もそっくりだね。」と言ったんだ。「うん。本当にそっくりだね。」お父さんと僕は杉の木を見上げながら大声で笑ったんだ。だって杉の木が急にお母さんに見えたんだ。僕の大好きな太くてたくましくて大きくて強くて優しいお母さんに。

## おかあさん、ありがとう

長崎県南島原市立野田小学校四年

門畑 英菜乃

「お母さん、今日は学校、来ないでいいよ。」じゅ業参かんの日になると、わたしはお母さんにいつもそう言っていた。それは、わたしの家はその業をしていて、お母さんはときどき、作業着のまま学校に来るからだ。友だちのお母さんたちは、きれいにおけしようをして、きれいな服を着て来る人が多い。だから、お母さんが作業着で来るのがはずかしかった。「先生、今日のじゅ業参観には、お母さん、来ません。」と言ったのに、お母さんはここにこして教室に入つて来る。今日はきれいな服で来ているかなとわたしはそればかりが気になった。

六月の道とくの時間のことだった。「おばあさんのおむかえ」という話を読んだ。主人公の友紀さんのおばあさんは、雨ふりの中、足が悪いのに、友紀さんをむかえに来る。しかし、友だちがおばあさんの足のことをわらったので、友紀さんはおばあさんに、「おばあちゃん、先に帰つて、早く、早く。」とおいかえしてしまふ。先生が「おばあさんの後ろすがたを見て、友紀さんはどう思ったでしょう。」と言われた。わたしは、ふき出しの中に、（おばあちゃん遠いところからむかえに来てくれてありがとう。ごめんさい。）

と書いた。足が悪いのに自分のために歩いて来たおばあちゃんに、友だちからちよつと言われただけで、ひどいことを言つて悪かつたと思つたからだ。そして、よく考えてみたら、わたしも友紀さんと同じだと思つた。お母さんは仕事をとちゆうでやめて、わたしを見に来てくれるのに、「お母さん、今日は学校、来ないでいいよ。」と言つていたのだ。わたしは急にはずかしくなつた。お母さんは悲しかっただろう。お母さん、ごめんさいとわたしは思つた。

わたしのうちは、いそがしいときは、朝五時からみんなそろつて畑仕事だ。学校へ登校していると、家族みんなが畑からわたしに手をふる。わたしは少しはずかしくて下を向く。あるとき、お母さんから、「英菜乃、あんた、のう業ばはずかしいと思つたらんね。それはまちがつとるよ。あんたがご飯を食べたり、ほしい物を買つてもらつたり、習い事にいけるのは、みんな、のう業のおかげやし、じいちゃん、ばあちゃん、お父さんのおかげとよ。今度、いっしょに畑で働いてごらん。」と言われた。それから、わたしはときどき畑仕事に行くことにした。みんなが一生けん命あせをかいして仕事をしている。お母さんも作業服すがたがあつている。そして、仕事が終わると、いつも、お母さんが、「英菜乃、今日は助かつたよ。ありがとう。」と言つてくれる。こちらこそ、おかあさん、いつもありがとう。そして、のう業をしていてくれてありがとう。

## 優秀賞 低学年の部 おかあさん、ありがとう

ぼくがおおきなこえではなしをしようとする、「もうちょっとちいさなこえではなしをして。かなちゃんがおきるでしょ。」と、おかあさんにしかられます。

かなちゃんは、ぼくのいもうとです。ここの三がつにうまれました。おかあさんは、かなちゃんのおせわでいそがしくて、ぼくとほとんどあそんでくれません。

ぼくは、ひとりで行るのがさみしくて、かなちゃんがいるへやへいくと、「はいってこないで。かなちゃんがねているから。」といわれます。ぼくは、しかたなくりびんぐにもどります。「かなちゃんばかりいいな。」と、ぼくはよくおもいます。

なつやすみ、ぼくがおそくまでおきていると、かなちゃんをねかしつけたおかあさんがぼくのところにやってきました。そして、おかあさんは、「はるくんがあかちゃんだったころは、よなきでたいへんだったんだよ。かなちゃんよりもたいへんだったんだから。なきはじめたら、一じかんぐらいなきやまなくて、もしかしらびょうきかなとかおもうたこともあったんだよ。」とはなしてくれました。ぼくが、そんなによなきをしていたなんてしりませんでした。ぼくが、そんなによなきをたをみて、おかあさんもないでいたそうです。あかちゃんのおかあさん、ありがとう。

## 優秀賞 低学年の部 ばあちゃんのおやさしさにありがとう

「ねねちゃんお帰り。」いつもの角で、ばあちゃんがニコニコ顔でまっついてくれます。わたしはばあちゃんが見えるのとれつをぬけ出して走って行きたくなります。

わたしのおばあちゃんは六十二才です。わたしと弟は「ばあちゃん」とよんでいます。わたしはばあちゃんの初まごです。ばあちゃんはいつもわたしを「かわいい、かわいい。食べちゃおうかな。」と言います。わたしが生まれた時、ばあちゃんはあまりにうれしくて、生まれたばかりのわたしの写真を色々な人に見せていたとパパが言っていました。わたしは、もう、ばあちゃんたらっとはずかしくなっただけで、本当はともうれいんです。

ママが仕事をしているのわたしはばあちゃんとする番をしています。下校の時の自けい団ではない日もばあちゃんはいつも近くの角でまっついてくれます。暑い日は顔を真っ赤にしながら、さむい日は手をヘアヘアとあたためながらまっついてくれます。に物が多い日は「重かったら。」とすぐにに物を持ってくれます。さむい日は、「さむかったら。」とほつたをなでてくれます。夏の日は帰るとつめたいタオルで顔や体をふいてくれます。わたしがいない時もわたしの事を考えて、用意してくれたんだと思うとすこくうれしくなります。

## 鹿児島県 日置市立妙円寺小学校一年 田平 遥飛

せわつてとてもたいへんだなとおもいました。

また、「うんちがしゅうかんもでなくてびょういんにいったり、くびがなかなかすわらなくてしんばいしたりもしたんだよ。」と、わらったかおでいしました。おかあさんがそんなにぼくのことをしんばいしてくれていたなんてすこしもしりませんでした。

ぼくは、おかあさんに、「かなちゃんのおむつをかえるのてつだつてもいい。」とききました。おかあさんが、「やってみるかい。」といったので、おしえてもらいながらやってみました。おかあさんは、「うまくできたね。ありがとう。」とほめてくれました。うれしかったです。

ぼくは、ぼくがあかちゃんのとくにおかあさんからしてもらったことを、かなちゃんにもしてあげてほしいとおもいます。

これからは、すこしぐらいのことがまんします。また、かなちゃんのほにゅうびんをあらったり、おむつをかえるのをてつだつたりします。

おかあさん、ぼくたちのためにいつもがんばってくれてありがとう。

## 茨城県 桜川市立紫尾小学校三年 山中 寧々

そうやっていつもやさしくしてくれるのに、私は時々文句を言ったりします。つかれていたり宿題がたく山あるとばあちゃんに八つ当たりしてしまいます。この間もせっかくばあちゃんがつくってくれたおやつを「これじゃいやだ。」と言って買ったおやつを食べました。「そっか・・・じゃ、すきな食べな。」と言ったけど少しさみしそうな顔だったのでむねがズキンとしたけど、ごめんねと言えませんでした。その事を後で知ったママは、「ママは小さい時いつもカギつ子だったから、いつも近くにばあちゃんがいたらよかったのって思ってた。だれかが帰りをまっついてくれる事はすこく幸せな事なんだよ。文句を言う前にありがとうでしょ。」とわたしをおこりました。心の中ではあちゃんのさみしそうな顔がかんて、なみだが出そうになりました。

もうすぐ二学期が始まります。きつとまた毎日ばあちゃんはその角でまっついてくれます。時々文句を言ってしまう時もあつたかもしれないけど二学期からは、ただいまの次に、今日もまっついてくれてありがとう、と言おうと思います。

ばあちゃんのおかげでねねはさみしくないよ。ばあちゃんいつもありがとう。

## 優秀賞 低学年の部 野さい作り名人のじいちゃん

鹿児島県  
霧島市立富隈小学校 三年

中村 樹音

「おまえたちゃ、いっどきいちべ、いかんか。」と、じいちゃんと言いました。わたしとお姉ちゃんといいちゃんは、近くの青果市場にトマトとカボチャのお金をうけとりに行きました。十分くらい車に乗っていると、青果市場に着きました。青果市場に着くと、小学校の体育館くらいの広さに、たくさん野さいがならんでいました。ふだんから野さいは見なれているけれど、とてもたくさんあったのでびっくりしました。「ヘチマ、オクラ、にがごい、ピーマンがあつぽ。」と、じいちゃんが野さいをゆびさして、わたしに教えてくれました。

じいちゃんは野さい作りの名人で、畑にヘチマもオクラもにがりもピーマンも育てています。わたしはじいちゃん野さいが大好きです。「じいちゃん、トマトはいくらしたのかな。」とわたしがたずねると、「1はこ八百八十円じゃつと。」と、伝びょうを見せてくれました。わたしもトマトを出かすときに、トマトをふいたり、はこを作ったり、つめたりするのを手伝ったので、トマトが売れたとわかつてうれしかったです。だからじいちゃんはわたしをつれてきてくれたのかなと思いました。

## 優秀賞 高学年の部 背中洗い

神奈川県  
桐光学園小学校 四年

佐野 裕愛

毎日いっしょにお風呂に入つて、背中を交代で洗うことが、ぼくとお父さんとの約束になっている。お父さんは、仕事を家に持ち帰つても、お風呂の時間に間に合うようにして先か後か、ぼくも見たいテレビよりもお風呂の時間を優先するようにしている。

正直、面どうくさいと思うときもある。ぼくの背中はお父さんのお父さんの背中は大いから、ちよびり、ぼくがそんなにしている気分にもなる。それに、仕事であせをかけたお父さんの背中が、すぐにあわが立たなくなるから、洗うのはけっこう大変だ。

それでも、ぼくの手の動きに合わせて真つ白いあわがふえ、お父さんの背中を包み込んでいくのを見ると、何だかうれしくなる。そして、ぼくの左手にお父さんの体温が上がついていくのが伝わると、ぼくもポカポカになる。

そのときふと、ぼくは、津波でお父さんを亡くしてしまった男の子のことを取り上げたテレビ番組のことを思い出した。大地震のすぐ後、ぼくと同じ4年生の男の子は、家族といっしょにひなん所の学校までにげた。でも、その子の父親は「近所のお年寄りが逃げていない」と言い、学校から車で出る。そして、あの大津波。男の子が次に父親と会ったのは体育館。それも、毛布にくるまれて横たわっていたのだ。男の子が父親の顔に手を当てると水より冷たくなっていたという。

じいちゃんが小さいときに、せんそうでじいちゃんのお父さんはしんでしまいました。だから小さいときからじいちゃん野さい作りの名人で、野さいやお米を作ってきたことを、じいちゃんによく話してくれました。わたしと同じくらいの年では、牛のさんぼや世話をしていたそうです。わたしなら牛がこわくて世話はできないだろうなと思います。じいちゃんはお米が大好きです。「じいちゃん、いっつまで畑しごとするの。」と、わたしは市場から帰ると中、じいちゃんに聞きました。「しがないさつさ、つくつとよ。」とじいちゃんはいっつこりえがおでこたえしました。そのえがおが私の心の中にすこくのこりました。

わたしは元気ではたらいっているじいちゃんが大好きです。わたしもじいちゃんみたいに、しごとを楽しくがんばれる大人になりたいです。じいちゃんはお父さんの野さいをわたしたちに分けてくれます。いつもおいしい野さいをありがとうございます。

家に着くと、じいちゃんはトラクターに乗って畑に行きました。「じいちゃんかっこいいよ。」と、じいちゃんのお父さんがたを見ながらわたしはつぶやきました。

そう、亡くなっていたのだ。

ぼくは、もしこの話が自分だったら、と考えた。すると、自然となみだがこみ上げてきた。

ぼくは、お父さんに聞いてみた。「ねえ、お父さんだったら、助けに行く?」「さっきのテレビの話か。その場になってみないとわからないなあ。」と、お父さんは答えた。ぼくは、どうしてわからないなんて言うの?家族は全員いて家族でしょ、いっしょにいるのが当たり前でしょ、とちょっと悲しくなりました。

すると、お父さんは言った。「いいか。自分があの場所に住んでなくて良かったとか、自分は運が良いだとか、自分のことばかり考えていちゃだめなんだぞ。苦しくてつらい思いをしている人たちが、助け合つて上を向いてがんばろうとしている、優しさと強さを学べ。」と。

ぼくは、どきりとした。すこくむずかしいことだけど、自分の事ばかり考えていたらいけないんだ、と思った。そして、今までよりもっと、家族といっしょにいる当たり前前時間を大切にしながらいっしょに頑張ろうと思った。

今、ぼくができることは、お父さん、お母さん、お姉ちゃんに、ぼくのせいっぱいの優しさをぶつけることだ。ぼくは、もう一度いいねいにお父さんの背中を洗い始めた。温かいお父さんの背中を洗えることへの感謝の気持ちこめて。

学校で理科のテスト中しずまりかえった時だれかがさげんだ。「じしんだ。」いそいでつくえの下にもぐり、防災ずきんをかぶった。つくえが大きく動いたのでつくえの足をぎゅっと強くにぎりしめた。どきどきした。校庭にひなんをしてしばらくするとみんなの家族がむかえにきた。わたしは、帰る友達に手をふった。日がくれてきてまだむかえがきていない三十人ぐらいの子ども達は体育館に移動した。

友達が、「お母さんむかえにこれないかもしれない。」と不安で泣いてしまった。

でもわたしは、お母さんはぜったい来ると思っていたので、「大丈夫だよ。ぜったい来るよ。」と友達をよめました。

わたしは、お母さんと二人ぐらしなので、お母さんしかむかえにこれない。

お母さんは電車で仕事に行っている。電車はすべて止まっていて電話もつながないと先生が言った。でもわたしは、信じていた。「お母さんはきつとむかえに来る。」と……

のこり十人。停電の中、かい中電灯の灯りで校舎の教

室に移動。わずかな灯りで紙とえんぴつを使い、先生とゲームをしてお母さんが来るのを待つ。夜になりおなかもすいてきたので、先生がおかしをくれた。それをわたしは、半分食べてのこりをそつとポケットにしまった。

一人、二人と帰りとうとう最後の一人になってしまった。しばらくすると先生が、「やつとお母さんと電話つながったよ。がんばって歩いてるつて。」と教えてくれた。歩いて？いつもは、電車で仕事に行っているからなん時間かかるところ。待つこと数時間。入口の方から声が聞こえる。お母さんだ。「ごめんね。おそくなってこわくなかった。」

「ぜんぜん。」わたしは、めいっばい強がって見せた。やっぱりお母さんは来てくれた。「これあげる。」のこしておいたポケットの中のおかしをわたすと、「ありがとう。暗いから星がたくさん見えるね。」とお母さんは笑顔を見せた。

お母さん。むかえにきてくれてありがとう。生きていてくれてありがとう。

わたしはお母さんの手をぎゅつとにぎりしめた。

## 優秀賞 高学年の部 ふとんにつまった宝物

奈良県

山添村立やまぞえ小学校 六年

南 俊 太 朗

「こちら、二階の二人早くねなさい！」と階段の下からお母さんがさげんでいる。

ほんととお父さんは、ふとんの中にもぐっておしゃべりを続ける。学校でさか上がりができるようになったこと、好きな食べ物のこと、車のこと、カマキリをつかまえたこと、秋になったら釣りに行く約束もしたね。

お父さんのがっしりしたうでをまくらにしながら、話しかれたら、お父さんの心臓の「ドクン、ドクン。」という音を聞きながらうとうとした。

ほくは、こんな毎日がずっとずっと毎日、ほくが大きくなるまでくり返されるんだと思っていた。

けど、お父さんは突然、会社でたおれた。お父さんが入院して一週間ほどたった日、お姉ちゃんと病院にかけつけると、もう動いていないお父さんがいた。

ほくは信じきれなかった。家族全員がインフルエンザにかかっても一人だけうつらない、スーパーウルトラ元気なお父さんが、突然亡くなるなんて。

お父さんがいなくなつて、はじめてわかったんだ。あたり前でいつもの事だったお父さんとのふとんの中の時間は、二人だけの大切な宝物だったんだつて。「ふとんには、お父さんのおいとほく達の話し声がつまっている

から絶対に洗たくしないで。」つてお母さんをお願いをした。

時どきさみしくなった時には、お父さんのベッドにころがった。そうすると安心した。

あれから三年たつて、三年生だったほくは六年生になった。ふとんは、ほんととお姉ちゃんがころがりすぎて、少しべつたんこになった。そしてほくは、一大決心をした。お父さんのふとんを洗たくしてもらうことにしたんだ。目をとじれば、いつでもお父さんのやさしい声がうかんでくる。だからだいじょうぶだつて思ったんだ。

お父さん、宝物の時間をありがとう。ほくは、お父さんとすごした9年間の中で、夜毎日ふとんの中で話しをした、あの時間が一番楽しかったよ。あの時お父さんに話した夢がかなう様にいっしょうけんめいがんばろうと思う。お父さんが生きたかった毎日だから、今日を大切にしながらつて思う。

お父さんのふとんは、ふとん屋さんで洗つてもらつて、新品みたいに真白でふわふわになつて返つてきた。ほくはドキドキした。お父さんのふとんは、ほくがもらうことになったから。いつから使わせてもらおうか。わくわくする。

お父さんに、ほくの「ありがとう。」が届きますように。



入選 低学年の部  
ぼくのおとうさん

宮城県  
柴田町立船岡小学校一年

安達 優人

ぼくのおとうさんは、じえいたいです。

まっくろでひげがぼうぼうでした。

3がつ11にちのおおきなじしんがきたときにしごとにいきました。つなみがあったところにひとをたすけにいきました。

ぼくは、おとうさんがひろうにみえました。ぼくもおおきくなったら、おとうさんみたいにひとをたすけるしごとがしたいです。

てれびでじえいたいひとががんばっているのをみて、ぼくのおとうさんもすごいなあとおもいました。

おとうさん、いつもおしごとしてくれてありがとう。

ぼくは、おとうさんがなんにちもかえってこなかったから、さみしかったです。

これからもいっぱいあそんでね。

かえってきたとき、おとうさんはぼくといもうとにあいたかったといました。おとうさんのおおは、

おにいちゃんといるとおもしろい。おにいちゃんは、へんなおおをしてわらわせる。おにいちゃんは、ごはんをたべるとき、ぼろぼろこぼす。ぼくのおにいちゃんは6ねんせい。いつもがっこうで1ねん2くみのぼくたちに、おもしろいはなしをしてくれる。

おこられていることが、ほんとうはわかっているんじゃないかなあ。

入選 低学年の部  
ぼくのらいばる

熊本県  
熊本市立桜井小学校一年

吉野 秀

おにいちゃんといるとおもしろい。おにいちゃんは、へんなおおをしてわらわせる。おにいちゃんは、ごはんをたべるとき、ぼろぼろこぼす。ぼくのおにいちゃんは6ねんせい。いつもがっこうで1ねん2くみのぼくたちに、おもしろいはなしをしてくれる。

おこられていることが、ほんとうはわかっているんじゃないかなあ。

おにいちゃんといるとおもしろい。おにいちゃんは、へんなおおをしてわらわせる。おにいちゃんは、ごはんをたべるとき、ぼろぼろこぼす。ぼくのおにいちゃんは6ねんせい。いつもがっこうで1ねん2くみのぼくたちに、おもしろいはなしをしてくれる。

そんなおにいちゃんは、よくけんかをしかけてくる。そのときは、おにいちゃんにはまけたくないとぼくはおもう。でも、おにいちゃんといるとおもしろい。おにいちゃんといっしょにいと、なんかちっちゃいおとうさん、ちびとうちゃんといると、なんかがんじがする。

おにいちゃん、いつもあそんでくれてありがとう。

おにいちゃん、いつもあそんでくれてありがとう。

おにいちゃん、いつもあそんでくれてありがとう。

## 入選 低学年の部 宝物をありがとう

沖繩県  
沖繩市立美東小学校 二年

砂川 正夢

ぼくがまだ赤ちゃんのたまごで、お母さんのおなかの中に入るところから、お母さんは、ぼくに絵本を読んでいたそうです。そのころの事は、もちろんおぼえていませんが、ぼくがうまれてからも今日までずっと絵本を読んできています。赤ちゃんのころのぼくのお気に入りの絵本は、エリック・カールさんの「はらぺこあおむし」でした。自分でページをめくっては、青虫みたいに絵本をかじったりして、ポロポロになるまで何度もくり返し、くり返し楽しそうに読んでいたと書いてありました。

二才になったぼくは、一人で「もったいないばあさん」の絵本を最初から最後まで、全部読んでみんなをおどろかせたりしたそうです。そのノートを初めて見せてもらった時、ぼくは、とてもうれしい気持ちになりむねのおくの方がジンと熱くなりました。

ぼくの家では、よるねむる前に、三十分間「絵本タイム」の時間があります。

お母さんが絵本を読んでいるうちにいつの間にかぼくのまぶたは、おもりがついたみたいにだんだん重くなっています。

お母さんの声の子守うたのように聞こえてくるのです。

お母さんは、いつもぼくにこう言います。「どんなに大切なおもちゃや高かな時計も、なくしてしまったりこわれてしまっても、一度読んだら正夢の心の奥にずっと残って絶対になくならないんだよ。本がくれる財さんは、一生消えない宝物なんだよ。」「ぼくは宝物を持っているのかな」と思いました。

ぼくが小学校へ入学してからお母さんは、読み聞かせボランティア「ふくろうの会」に入って毎週木曜日には、学校へ絵本を読みに来てくれます。一年生から六年生までみんなにいろいろな絵本を読んでもくれます。木曜日の朝はとても楽しんでいます。

今のぼくが本を大好きなのは、きつとお母さんが赤ちゃんのころから毎日、毎日ぼくのために絵本を読み聞かせてくれたからだと感謝しています。

読みたいときにいつでもぼくのそばには、本があるので幸せだなあと思います。

たくさんの宝物を、ぼくにあたえてくれたお母さん。ありがとう。

## 入選 低学年の部 大すきなおとうさん

鹿児島県  
鹿児島市立明和小学校 二年

牧 紗寧

「ただいまめ。」と言って、おとうさんはしごとからかえってきます。「おかえりんご。」と言って、わたしは、いもうとはげんかんに行きます。そのときわたしは、おもしろいのでたのしい気もちになります。ニコニコえがおになります。

休みの日には、クイズのこたえやしゅくだいがまわがっているときおとうさんは、「おならブブー。」と言います。そのときわたしは、こたえがまちがっていてざんねんだけど、わらってしまいます。ときどき「おならブブー。」と言いながら本当におならをします。わたしはタイミンクよくできないので、「すごいね。」と言います。するとおとうさんもおかあさんも、わたしもいもうとも大わらいします。

そんなおとうさんのしごとは、けいさつかんで、こう通じこのげんいんをしらべたり、みんながこう通ルールをまもつてじこがなくるようにパトロールをしたりしています。日曜日でもま夜中でも、しごとをしています。わたしは、夜はくらくてこわいし、ねむたいのでしごとは大へんだらうなと思います。だから、休みの日はおとうさんを九じまでおこしません。ゆつくりねてほしいからです。

わたしは、つかれていてもいつもまじょうだんを言わせてくれる、おもしろいおとうさんが大すきです。しごとをがんばってかぞくやちいきの人をまもつてくれるかっこいいおとうさんが大すきです。

わたしも、いろいろな人をわらわせて、たのしいきもちにさせたいです。おとうさん、いつもありがとう。



ぼくのジイジはスーパ―おじいちゃんです。三月十一日の地しんの時、だれよりも早くぼくを学校へむかえに来てくれました。ぼくが下校時間だったので、もしかしたらプロックべいの下じきになっているのではないかと心ばいして「颯太は!？」と言って、まだゆれがおさまらない時から家とび出してぼくをむかえに来てくれたそうです。ぼくは、地しんの時、校庭でサッカーをして遊んでいました。外で走って遊んでいたぼくにもわかるくらい大きな地しんでした。その時の友だちや先生たちの様子からも、これはただの地しんじやないという事はわかりました。ぼくは、とてもこわくてなきそうになりました。そんな時に、ジイジがすぐむかえに来てくれました。ジイジを見つけた時、すぐうれしくてまた、なきそうになりました。とても安心しました。

地しんの後、父の仕事はとてもいそがしくなり、父と会えない日が何日もつづきました。でも、ぼくはいつもジイジがそばにいてくれたので心強かったです。いっしょに水をくみに行ったり、買い物にならんだりもしました。父に会え

なくても、ジイジが野きゅうやサッカーをして遊んでくれました。昔の遊びも教えてくれました。カンけりや少し変わったジャンケンが楽しかったです。てい電の時でも楽しく遊べるのがわかりました。ジイジは遊びの天才だと思いました。あの時、(さむくて、いつまでも暗い日がつづくのかなあ)と思ったけど、ジイジがいたからぜんぜんこわくなくなりました。(ジイジがいなかったら、ぼくは母と弟二人でどうしていたんだろう、ぼくはジイジのようにできたかなあ)

ジイジはサーフィンをします。今は地しんでサーフィンできません。そのうちおちついたらいっしょにサーフィンに行きたいです。行く車の中で、たくさんのお話を教えてほしいです。これからも、ずっといっしょにいたいんです。いつもは、はるかしくてちゃんと見えなくて、今日はちゃんと見えます。ジイジ、いつもいろんな所につれて行ってってくれてありがとう。いっぱい遊んでくれてありがとう。いろんな事を教えてくれてありがとう。これからも、たくさん遊んで、たくさんのお話をぼくに教えてください。大すきです。ジイジ、ありがとう。

## 入選 高学年の部 ぼくのお父さん

ぼくのお父さんは、お寺の仕事とほ育園の仕事をしています。お父さんは毎日毎日夜おそくまで仕事をしています。休みはないです。家族で出かけることが多いです。お母さんとぼくたちで出かけることが多いです。そんなとき、「いっしょに行けたらいいのになあ」、「さみしいなあ」って思います。お父さんは、なかなか出かけられないけど、ぼくたちに本を読んでもくれたり、ぼくたちの話をよく聞いてくれたり、お母さんがおこつたら、ぼくたちを守ってくれます。

今までの中で一番うれしかったことは、花をいけることを教えてもらったことです。かたづけのし方も教えてもらいました。ぼくは、はじめて花いけをしました。お父さんがいけた花は、すごくきれいでした。お父さんが、「おれのあとは、おまえにたのむ。」とぼくに言いました。それを聞いて、ぼくは、すごくうれしかったです。そして花いけが終わってから、かざつてある花をみながら、お父さんが、「すごくきれいだな。」と、ぼく

に言ったので、「うん、すごくきれいだね。」と、ぼくも言いました。ぼくも、お父さんみたいにじょうずに花いけをしたいと思いました。

お父さんは、時どき料理も作ります。一番おいしいのが、野菜のためです。お母さんが料理を作れない時に作ってくれます。みんなお父さんの野菜のためが大好きです。お父さんは、いろいろな人にへんしんします。お寺のじゅうしよく、ほ育園の園長先生、ぼくたちのお父さんにへんしんします、そんなお父さんはカッコいいです。

ぼくたちとけんかするときもあるし、お母さんとけんかしたりするけど、そんなお父さんが、ぼくは大好きです。ぼくは、お父さんみたいなお父さんになりたいです。

お父さんは、人の話をよく聞いてくれます。ぼくは、お父さんはすごいなあと思います。ぼくも、お父さんみたいに、人の話を聞ける人になりたいです。

お父さん、いつも、ありがとう。テレビのへやでねないで、ふとんにちゃんとねてね。

「よし、わかった。すぐ行く」まるでテレビにでてくるイケメンの刑事さんが言っているみたいだけど、言っているのはわたしの父さんだ。さつき家に帰ってきたばかりで、夕ごはんも食べてないし、おふろにも入っていない。実はいそがしくて昼ごはんも食べるひまがなかったらしい。どこからどう見てもイケメン刑事とはほど遠い、くたくたヨレヨレのお父さんが、氣力をふりしほつて家を出て行った。

わたしの父さんは病院の心ぞう内科で働いている。心さんこうそくのかん者さんが救急車で運び込まれると、病院用のけい帯電話ですぐ呼ばれる。一分でも一秒でも早く手じゅつをしなければかん者さんの命があぶないから、いつ、どんな時でも飛び出していく。お正月でも、おふろに入っている中でも。

わたしがまだ小さいころのことだ。家族で愛知県と静岡県のある山から家に帰ると中で、車を運転しているお父さんのけい帯電話が鳴った。こんな遠い所からまさか行かないだろうと思っていたら、「三十分では着かないけれど、できるだけ早く行くようにする。あ、それか〇〇(菓の名前)をヒカチュウで。」え？あのように園で大人気のモンスタターが、心ぞうが止まりそうなかん者さんに十万里の電氣ショックを？お父さんがわざわざ行かなくても電氣ショックで治る気がしたのに、お父さんはJRの駅で

そばでわたしたちを車からおろして、悪いけどここからお前たちは自分で帰ってくれ、と言って走り去ってしまった。皮下注(射)を聞きまちがえたことで今でも笑い話になるけれど、その時はひどいお父さんだと思つた。

思い出してみると、小学校の入学式の時もクラス写真をとる時にはいなくなっていたし、お兄ちゃんやわたしのたん生生日、クリスマスもいっしょにお祝いしたことの方が少ない。「もう、お父さん、そんなに病院が好きならもう家に帰って来なくていいじゃん。病院と結こんすればよかったじゃん」いつだったか、そんなことを言ったら、お父さんはすごい悲しそうな顔をしていた。でも、わたしには何も言わなかった。

それを見ていたお母さんが、あとからわたしにそつと、ひとつの手紙を見せてくれた。それは、お父さんがきん急手じゅつをしたあるおばあさんからの手紙だった。「もういつおむかえが来てもいいと思つておりましたが、先生から助けていただいた命、大切にします」わたしは、ちよつとびっくりした。お父さんがお父さんだけど、病院ではかん者さんたちのヒーローなんだね。

お父さん、たくさんの命を救う毎日で大変なのに、たまに休みがあると、わたしたちと遊んでくれたり、勉強を教えてください。お父さんはスーパーヒーローだよ！

## 入選 高学年の部 ねえちゃんの歌

お昼寝の妹のほっぺかわいくて  
そーっとさわる風のふりして

ねえちゃんがこんな短歌を詠んでくれていたことを知つたのは、だいぶ後になってからだ。そして、こんな風に思つてくれていたんだということも、そのときにわかった。

私より3つ年上のねえちゃんは、とてもものんびり屋で、ほとんど怒つた顔を見たことがない。いつもだいたい笑っている。ママに、「早くごはん食べられ！」とか「早く用意しられ！」とよく注意されているけれど、「はい」と答えてニコニコしている。ねえちゃんは今年中学生になったので、朝学校へ一緒に行くことができなくなつた。でも、小学校のグラウンドのすぐ向こうに中学校が見えるから、私はさみしくない。

半年ぐらい前、私がママに小さなウソをついたことがあった。はじめは、そのことがへつちやらだつたはずなのに、なぜかだんだん気になってきて、どんどん心が重くなってきた。どうしようもなくなつて、私はそのウソのことをねえちゃんに打ち明けた。ねえちゃんはびっくりした顔をして、「すぐに本当のことをママに言った方がいいよ」と言った。私は「ウソをついたこと、きつとすこく怒られるからダメ」と言

富山県  
富山市立堀川小学校 四年

松田 わこ

い返した。ねえちゃんはずいぶんニコニコ顔とはまったくちがう困つたような顔になって、「でも、今本当のことを言わないと、もつともつとウソをついてしまうことになるよ」と言つて、私をぎゅつとだきしめた。そのとたん、涙がポロポロ出てきた。ママが帰つて来るのを待つて、ねえちゃんと一緒に、本当のことを話した。もしねえちゃんがいなくなつたら、私はあのウソの行き先を見つけれずにはいたと思ふ。今でも「ありがとう」の気持ちでいっぱいだ。

ねえちゃんは今日から合宿メロンパン  
2こ食べちゃったのにさみしい

ねえちゃんが夏の合宿に出かけて、私はねえちゃんの分のメロンパンも食べていいことになった。食べている間は「ラッキー」と思っていたのに、急にさみしくて、つまらなくなつてしまった。その時の歌だ。ねえちゃんの歌に私がときどき出てくるように、私の歌にもねえちゃんがよく登場する。いろいろな「ありがとう」を、直接伝えるのはむずかしい。私は、口に出して伝えられない分は、せめて短歌ノートにそつと残しておきたいと思う。

## 10年後のお母さんへの手紙

兵庫 神戸市立北須磨小学校 五年

三木 巴月

昨日、いとこの家に行くとおばあちゃんが「巴月に手紙や」と、持ってきてくれました。それは、ほくがまだ9か月で、大分県に住んでいたころ神戸に遊びに来ていて、いとこたちと行った、「21世紀☆みらい体験博」で未来ポストに入れた、10年前にお母さんがほくあてに書いたものでした。

その手紙を受けとった時、こんな手紙があることも知らなかったし、みんなの前であけるのは、もったいない気がして、自分のリュックにすぐしまいました。

そして、夜お母さんといっしょに、あげました。そこには、9か月のほく(2001年8月7日)の様子と、今のほく(2011年)へのメッセージが書いてありました。9か月のほくは、「まあー」とさげび、つかまり立ちや、つたい歩きをしている赤ちゃんでした。「このハガキを受け取った巴月くんは、どんな男の子かな? やんちゃばうずかな? とにかく毎日元気に走りまわっているんだろ? うね。これからも元気にのびのび育てていって下さい。お母さんは、2001年も2011年もずーっと、あなたが大好きです。」と書いてあり、泣きそうになりましたが、「お母さん、これ『もうすぐ10才になる4年生の巴月』って書いてあ

るやん。ほく5年生やで!」とびつくりしてお母さんに言いま

した。「あ、やっぱりまちがってたね。ポストに入れてから、『まちがってるかも?』って思って、2年間くらいは気にしててん。でも、お母さんらしいやろ。大事な所でまちがって。」と、涙をふきながら、お母さんは、わらいました。それを聞いてほくは「なん

でそんな大事なまちがいを10年間もほっておいたん?」と言いました。するとお母さんは、「まだあるで。巴月はやんちゃばうずには、育たなかったし、お母さんも、こんなおこるお母さんになる

とは思わなかったから、この手紙を見て反省したわ」といつて、10年前の当日にとった写真をみせてくれました。「な、こんな小さかったのに、こんなに大きくなってんから、予想できひんやろ。でも、いい子に育ててくれてうれしいわ。」といつてくれました。ほくは大事にされているんだと、うれしくなり、涙が出ました。

だからほくも、10年後のお母さんに手紙を書きます。内容はひみつです。

でもほくは、計算まちがいせずに、きちんと10年後の50才のお母さんに書くから、楽しみにして下さい。そして、2021年にいっしょにその手紙を読みましょう。

## 入選 高学年の部

## まる子と友蔵よ、永遠に

茨城県

桜川市立南飯田小学校 五年

安田 桃佳

古室恒男七十八才。身長百五十七センチ。体重五十二キロ。しゅ味、ゲートボール。特技、けんすい。好きな食べ物、寿司。これが、日々、わたしを育ててくれている祖父だ。わたしと祖父は、ちびまる子の「まる子と友蔵」と家族からよばれるくらい仲が良い。祖父とは、びつたり気が合うし、よとわたしのかわいがつくれる。

毎日恒例のせい比べでは、わたしの頭からまっすぐ手をもつてこない。必ず、目まであるわたしの身長を鼻の所にもつてきて、「中学校になったら、ぬかれちゃいますね。」と、きまつて言うおちやめな祖父だ。家族は、「もう、今年にぬくんじゃない。」なんて心無いことをいうが、わたしは、「そうですね。」と軽く、さらっと返事をするようにしている。身長なんて、わたしより大きくても小さくてもわたしよりえらいことにはかわりないからだいじょうぶだよ。おじいちゃん。

もちろん、きびしいときだつてある。でも、正しいからなつて得してしまう。祖父は、わたしの約束を決してやぶつたことがない。じゅくの送りむかえも、絶対おくれたことがない。自分にもきびしい人だ。だから、わたしは、しかられたときには素直に「ごめんなさい。」が言える。

祖父は毎日日記を書いている。国語で勉強した兼好法師と同じく「つれづれなるままにひくらしところにつりゆくよしなしごとをかきつくれば。」なのねと

思っていたら、そうではなかった。祖父が毎日きちんと日記を書いているのは、わたしち家族のためだった。後々、いろいろなことが分かんなくてごまかれないように、地いきのならわしやさまざまなことが書かれていた。

今年の春、そんな祖父が原因不明の病気にかかってしまった。病院で、つかれが出たと言われて、家でりよう養することに。それでも頭がいたいのは治らず、今度は全身にしつしんができてしまった。今度はひふ科に行つた。病名は帯状ほうしんといひ、その病院でも体全体にできる帯状ほうしんは三例目ということだった。通常一部分だけでもいたいの体全体というのだから相当いたかつたはずだ。相変わらずがまん強い。完治するまでに、一か月半かかつた。その間に、祖父と仲良しのわたしは祖父の菌から水ぼうそうになり、二人仲良くりよう養することになった。祖父は、申し訳なさそうだった。が、わたしは、早く水ぼうそうにかかれてほつとした。やっぱり二人の仲は本物だった。

後一月で、祖父は七十九才になる。お誕生日プレゼントは、手作りの花束を予定している。七十九本に「つづつ「ありがとう」の手紙をつけるつもりだ。いっぱいあるのでそろそろ準備を始めようと思う。これからも輝け古室恒男七十九才。まる子と友蔵は永遠だよ。

## おじいちゃんと歩いた里山

神奈川県  
川崎市立南菅小学校 六年

清水 晟志

ぼくのおじいちゃんは櫻守でした。宝塚の亦楽山荘えきらくさんそうという里山の桜を守り育てていました。ぼくの生まれた1999年に、おじいちゃんたちが「櫻守の会」を立ち上げ活動してきました。

二年前、おじいちゃんの七十七才のお祝いの時、いとこ達みんなでも亦楽山荘へ行きました。おじいちゃんは足が速いので、ぼくはその後を生けい命息を切らしながら登って行きました。おじいちゃんは山のことをいろいろと教えてくれました。木の名前、虫の特徴、山道の歩き方：・ぼくはいつも感心していました。おじいちゃんは、山のことを何でも知っている、ぼくにとても「山の博士」です。

でも、それがぼくとおじいちゃんの最後の山登りでした。実はその時おじいちゃんの肺にかけがあるとお医者さんから言われていて、山登りの後しばらくして、おじいちゃんは肺を半分以上もとってしまったからです。

おじいちゃんが入院している病院へぼくがお見まいに行つた時、おじいちゃんはとてもやせていました。足がとても細く、歩けるかなあと心配になりました。ベッドの周りにいろんな機械があり、それとおじいちゃんはチューブでつながっていました。散歩の時も車いすで病院の周りを回るくらいしかできなくなっていました。「おじいちゃんは今もう山には行けない。」と聞いた晩、おばあちゃんが作ってくれたごはんもおいしく感

じられませんでした。

その晩はぼくはなかなかねむれませんでした。この日は病院で見たおじいちゃんとは、半年前元気なぼくの前を歩いていたおじいちゃんと同じ人とは思えなくて、とてもショックでした。帰りの新幹線の中で、ぼくはおじいちゃんと最後に山に行つた日を思い出していました。あの時、ぼくはおじいちゃんに総合で学習したばかりの里山のことを話していました：「おじいちゃん、里山では人の手が加えられたからこそ生きやすい動物がいるんだよね。」人の手が加えられていない山の木より、里山の方がずっと大きく成長するんだよね。」

ぼくの言葉に、おじいちゃんは「そうそう」と目を細めていました。おじいちゃんは、子供達に里山の楽しさを伝える活動もしていたので、孫のぼくが里山に興味があるのを見てうれしかったのでしょう。

あれからリハビリをして、おじいちゃんはいよいよ元気になりました。でも酸素ボンベをつけているので、山での活動はもうできなくなつてしまい、櫻守も引退してしまいました。

今年の夏休み、おじいちゃんに会ったらこう言うつもりです。「おじいちゃん、櫻守おつかね様！おじいちゃんといっしょに登つた里山は楽しかったよ。今すぐおじいちゃんの手を握りたいよ。うな事はできないけれど、里山を守つていこうという気持ちをぼくもずっと大切にしていこうよ。」

入選 高学年の部  
母の魔法に感謝をこめて

千葉県  
国府台女子学院小学部 六年

渡部 優依花

「お母さん、お腹すいたあー！」「ただいま」の代わりに、そう言いながら玄関のドアを開けると、「おかえり」と言う母の声と共に、美味しそうな匂いが私の鼻をくすぐった。私は、この瞬間が何よりも大好きだ。家に帰って来たんだなあという安心感が私の身体を優しく包み込んでくれるからだ。食卓に出される母の手料理は、特に見映えが良い訳でも、手の込んだ料理でもない。けれど、どんな高級料理よりも美味しくて私をホッとさせてくれる。母の魔法の最たるものだ。

それ以外にも、母の魔法は昔からあった。二千グラム足らずの未熟児で生まれた私は、二才を迎える頃に病院で小児ぜん息と診断されそれ以来、何度も発作をくり返してきた。そのほとんどは夜中から明け方にかけて起きることが多く、その度に母は、私を抱き起こして何時間も背中をさすってくれた。幼い私は、まだ上手に吸入器から薬を吸い込むことが出来なかったが、母は手動式の吸入器を使って、辛抱強く私に薬を与え、呼吸が落ち着くまで私の背中をさすり続けてくれた。

「大丈夫、大丈夫！」まるで、おまじないの様に何度もつぶやく母の声と手の平のぬくもり。母に守られているという安心感が何よりも心強かった。不思議と少しづつ呼吸が楽になつて、眠りにつくことが出来た。紛れもなく、母の魔法だった。小学校に入学してからも、低学年の頃はぜん息の発作が起

きる度に、母が学校への送り迎えをしてくれた。片道、電車を乗りついで四十分の登下校。私が足をけがした時は、ランドセルや荷物を持った上に、私を背負って駅の階段を降り下りしてくれたこともあった。自分自身もぜん息の持病を持つ母にとつて、相当な負担だったに違いない。そんな時も、母は嫌な顔ひとつせず、逆に私を励ましてくれた。六年生の今まで、母は共に笑い、考え、時には一緒に悩んでくれた。そして、いつも勇気付けてくれた。母は私の一番の理解者だった。そんな母と最近、さ細なことでも口げんかになり衝突することが多くなつてしまった。こんなふうになんか言つてもいいな。と反発してしまふ。悲しそうな母の顔を見て、しまった！と思ひながら、どうしても素直になれない日々が続いていた。

そんな中で、あの三月の東日本大震災が起きた。母は、私をすばやくテーパーの下に押し込み、毛布で私を包んでくれた。おびえる私を抱き寄せ、いつもの様に「大丈夫、大丈夫！」と何度もつぶやいて、背中をさすってくれた。私は母の魔法の中で、守られていた。

震災は、私に大切なことを思い出させてくれた。いつも私のことを一番に考え、守ってくれる母。魔法は全て母の愛から生まれていた。今度は私の魔法で母を笑顔にしよう。「お母さん、ありがとう。」と、感謝を込めて。

## だいすきなばあば

東京都  
星美学園小学校一年

高井 風佳

わたしのおうちには、おばあちゃんもいつしよにすんでいます。わたしはおばあちゃんのことを「ばあば」とよんでいます。ばあばのおなまえは「ふ」からはじまるので「ふうちゃん」とよばれています。わたしもみんなに「ふうちゃん」とよばれるので、わたしとばあばは「ふうちゃんチーム」です。わたしとばあばのへやはおとなりどうしなので、おおきなこえでよぶとすぐにおへんじしてくれます。ふたりはいつもなかよしです。

ばあばは、わたしががっこうに行くときにもいつもおみおくりをしてくれます。ばあばがおみおくりをしてくれど、わたしはすぐげんきになります。わたしががっこうからかえってくるときは、ばあばはいつもおうちでまっいてくれます。たまにバスまでおむかえにきてくれます。ばあばがまつていてくれると、すぐくうれしくなります。

わたしがおべんきようをしているときは、ばあばはしず

かにしてくれたり、あついひはせんぶうきをわたしのほうにむけてくれたりします。そうするとわたしはきもちがしつかりして、おべんきようをがんばろうとおもいます。

わたしがちいさいときからずっと、いつもばあばはわたしのために、いろいろなことをしてくれました。わたしのために、じぶんのことよりわたしのことをいっしょうけんめいやってくれます。

ばあば、いつもどうもありがとう。ばあばがわたしのためにいろいろやってくれて、わたしはとってもうれいす。

わたしがおおきくなったら、ばあばがしてくれたのとおなじように、わたしもばあばのためにいろいろなことをしてあげたいとおもいます。

これからもふたりに、げんきでびようきにならないようにきをつけて、いつまでもばあばといっしよにいたいす。

わたしは、ばあばがだいすきです。

うれい。

## おばあちゃんありがとう

茨城県  
常陸大宮市立緒川小学校一年

岡崎 諒

いつしよにすんでいるかつこばあちゃんはやさしくて、むかしのあそびをおしえてくれます。

かぎんぼうの木のえだやかえるつぼのきでひっぱりっこ。きれなかったほうががち。ばあちゃんはよわいす。こうえんにいったとき、ほくがおとうさんとおかあさんにおしえてあげて、いつしよにあそびました。

ささのはつばでふねをつくってくれます。おとうともいっしよにかわへいって、みんなでささぶねきようそうをします。たのしいす。

あと、はたけからじゅうだまのたねをあつめてくると、おてだまをつくってくれます。むかしのうたにあわせておてだまをします。ばあちゃんは、とてもじようすです。

ようちえんのとき、ばあちゃんのへやへとまりにいくと、ねるまえにやくそうのずかんをよんでくれました。ほくは、あおくてきれいなじゃのひげのみをあつめるのがすきになりました。どくだみ、つくし、なんてんのあかいみ。にわでみつけると、けっこうわかります。ようちえんのえんちょう先生に

「しよくぶつはかせ」とよばれて、うれしかったす。

ほくは、四つばのクローバーをみつけるのがとくいす。五つばや六つばもみつけたことがあります。すぐこうふんしました。

しよががっこうのかえりみちで四つばのクローバーをみつけてくると、ばあちゃんにあげます。「ながいきしてね。」といつてわたすと、とてもよろこんでわらいます。ほくは、ばあちゃんのわらったかおがすきです。

もしもばあちゃんがいなくなったら、かなしいす。ひとりではさみしいから、ほくもいつしよにてんごくにいってあげたいす。

でも、そういうとばあちゃんは「77さいまでながいきだし、りょうくんが大きくなるまでみまもつてあげるから、だいじようぶだよ。」といいました。ばあちゃんは、わらいながらなみだをこぼしていました。

これからも四つばのクローバーをいっばいとつてくるから、もつとながいきしてね。



## 「いもうとができてわかったこと」

茨城県  
つくば市立竹園東小学校二年

木田 泰陽

ことしの4月に、ぼくにいもうとがうまれました。なまえは、さくらといます。うまれるまえ、ママのおなかはずごく大きくなりたいへんそうでした。

3月に東かんとう大じしんがありました。ママのおなかは、大きくなりたいへんなのに水も電気もとまり、よしんもいっぱいありました。それでもママは、大丈夫、大丈夫とほくをいっしょうけんめいもってくれました。水がでなくてこまったとき、バケツで水をとりにきました。おもとそうにはこんでいる、ママを見て、ぼくは、思わずてっただいました。

4月になってあかちゃんが出来てからもママは、ますます、たいへんになりました。あかちゃんとはくのがっこうのじゅんびです。あかちゃんは、すぐなくのおっぱいをあげたりおむつをかえます。よるもねないで、おっぱいをあげているとママからききました。ま

まがあかちゃんにかまっているとき、ぼくはうらやましくおもい、すぐすねたりあまえたりしましたが、それでもママは、すぐにかまってくれました。

ある日、よるねるまえにママが、しくしく泣いていました。ぼくがきいたら、ちよつとつかれたといっていました。そんなママを見てあまえてばかりでは、いけないと思いました。ぼくは、つよくなつてママをおてつだいしようときめました。するとママは、すこしづつ、えがおがふえていきました。ぼくは、ママのえがおがだいすきで、にこにこしているとうれしいです。いもうとができたから、ママのたいへんさをするのができたし、ありがとうのきもちをおてつだいでかえていきたいと思えました。そして、しっかりとしたおにいちゃんになれるようにがんばりたいです。だってママは、ぜったいそうなつてほしいと、おもっているはずだから。

佳作  
ありがとう ちみさん鹿児島県  
垂水市立協和小学校一年

川畑 茉央

わたしは、六さい。六ねんかんありがとう。

ちみさんのりょうり。にくじゃが、すぶた、はっぽうさい、てんぷら、チャーハン、ポテトサラダ、スパゲティサラダ。

なんでもじょうずに、おいしくつくってくれてありがとう。

ほいくえんのとき、わたしが、おなかをすかしてかえつてきてもちみさんが、ごはんもおかずもじゅんびをしてくれました。

ほいくえんのむかえも、ちみさんがいつもきてくれました。

わたしは、

「はやくむかえにきて。」

つていつたから、四じ三十ぶんまでにならずきてくれました。とてもうれしかったです。

あめがふついているときは、ちみさんがかさをさしながら、わたしをおんぶしてくれました。せなかがきもちよ

くて、いえについてからもおりないで、そのままねていたこともあったそうです。

わたしが、おおきくそだったのは、ちみさんのおかげです。

ちみさんのつくってくれたにしがだいすきで、あかちゃんのころからたべていたそうです。ちいさくたべやすいようにきつてたくさんたべさせてくれたよとパパとママからききました。

もう、ちみさんのつくったおいしいごはんがたべられないから、さびしいです。

もうすこし、ながいきしていてくれたら、わたしがおてつだいできていたのとおもいます。

いつもやさしかったわたしのおばあちゃん、ちみさん。

ほんとうにありがとう。いまでもだいすき。

これからも、ずっとずっとだいすきだよ。ちみさん。

## 大すきな、大すきなおかあさん

鹿児島県  
池田学園池田小学校一年

迫田 妃花

「ひな、いいかげんにしなさい。」  
今日もげんきなおかあさんのおこったこえがひびきます。わたしのおかあさんは、おこりんぼうでとてもこわいです。しゅくだいをだらだらしていると、すぐにみつかります。まるで、レーダーのようです。

わたしは三人兄弟のまん中で、一人だけの女の子です。「ひなちゃんはお女の子だから、かわいくしないとね。」と、ようふくやかみのけのアクセサリーをかけてくれます。朝、いつもかみのけをむすんでくれたあとに、「ひな、こつちむいて。うん、かわいいかわいい。」とわたしをみて言ってくれます。

おにのようにおこったときはぜんぜんちがつて、とってもやさしい顔です。

学校で百点をもらつてかえると

「ひな、てんさい。」

というときもあれば、

「百点はふつうだよ。」

というときもあって、おもしろいです。

「ひな、耳みせて。」

と、おかあさんがいうと、わたしはおかあさんのおひざに

あたまをのせます。おかあさんのおひざとおなかの間で、ほわほわしたいいきもちになるのでいいすきです。

こわいゆめをみたときは、だっこしてほつべをさすつてくれます。わたしはあんしんしてまたねむれます。

おかあさんが、  
「うまれてきてくれてありがとう。三人はママのたからものだよ。」

と言いました。それから、こつそりみみのうしろで、

「ひながいちばんだよ。」

と言ってくれました。

わたしは、おかあさんが大すきでしかたありません。大きくなつてはなればなれになったらと思うと、かなしくなります。だけど、  
「ひながゆめをかなえられるように、いっしょにがんばろうね。」

とよく言ってくれるので、いっしょにがんばって、あんしんさせてあげたいです。

おかあさんがおばあちゃんになつても、ずっといっしょにいるからね。おかあさん、いつもありがとう。ひなは、おかあさんがだいすきだよ。

佳作

## おとうさん、いつもありがとう

鹿児島県

日置市立伊作小学校二年

山崎 慧史

ほくのおとうさんは、ほくと同じ学校にかよっています。ほくのかよう小学校の教頭先生です。

学校で、おとうさんにあうと、いつも、「がんばってね。」と「言つて、体をタッチしてきます。ほくは、「はあい。」「とへんじをします。おうちでも学校でもあうので、何だかふしぎです。でも、学校のおとうさんとおうちのおとうさんは、ちがいます。

学校でのおとうさんは、みんなの教頭先生なので、いつも、いそがしそうです。しょくいんしつでパソコンをしたり、にもつをはこんだり、たんにんの先生がお休みのとき、ほくたちに、おペンきょうを教えてくれたりします。

朝は、ほくが、朝ごはんをたべるころには、学校へ行きます。そして、夜は、ほくたちがねるころかえってくるので、あえないときもあります。たい風の日も、雪の日も、学校に「ばん早く行かないといけません。お休みの日も、学校へ行つて、見回りをしたり、しよく小やのにわとりにえさをあげたりしています。ほくは、「学校のみんなのために、がんばつてはたらいっているんだなあ。大へんだなあ。」と思います。

おうちでのおとうさんは、やさしくて、いろいろなことを教えてくれます。ほくは、おとうさんと、おとうととキヤッチボールをしたり、サッカーをしたりしてあそぶのが、大すきです。でも、ほくがわるいことをすると、おこります。「あなたのために言うんだよ。」と、おかあさんが教えてくれます。

いもうともまだ小さいので、だっこしてねかせるのは、大へんそうです。ほくが、「マッサージしようか。」と言うと、「いいよ。」と言います。本当はつかれているのになと思ひます。

ほくが、入いんしたときは、しごとがおわると、びよういんにきて、ほくのよこでねてくれました。今も、ほくが、「一人じゃねむれない。」と言うと、いっしょにねてくれます。

ほくは、おとうさんが大すきです。学校に行つてもあえるおとうさんは、ほくのじまんです。これからも、きょうだいなかよくして、おとうさんをよろこばせたいです。おとうさん、いつもありがとう。

佳作

## わたしのおばあちゃん

北海道  
愛別町立愛別小学校二年

若林 笑見

わたしには、お父さんのおばあちゃんとお母さんのおばあちゃんとおじいちゃんがあります。お父さんのおばあちゃんはことして八十八さいになります。二年前から、にんちしようというびょうきになりました。年をとるとだれでもなるんだとお父さんがいつていました。

お父さんのおばあちゃんをわたしは大好きです。でもおばあちゃんは、わたしのことがわかりません。わすれてしまったのだそうです。わたしのお母さんも、お父さんのことも、お兄ちゃんのことともわすれてしまいました。

「うーんわからない」とわたしにむかつて言います。

わたしがほいくしよにかよっていたとき歩くのもたいへんになったおばあちゃんにうんどう会やおゆうぎ会のビデオを見てもらいました。おばあちゃんはテレビにむかつて大きな声で「笑見がんばれ！」とおうえんしてくれました。一とうしょうをとつたら、とつてもとつてもよろこんでくれ

ました。わたしが食べきれないくらい、ごちそうもつくつてくれました。たんじょう日には、ケーキとプレゼントをおくつてもらいました。わたしも、かたたきをしてあげました。おふろやさんでもいっしょに入つて、うたつたり、お話をいっばいしました。とてもたのしかったです。

そんな大好きおばあちゃんがつせんにんちしようになつたのです。

でもいいんです。わたしにとつてはにんちしようになつても大好きなおばあちゃんです。おばあちゃんとのたのしい思い出はきえませんが、いつまでもわすれません。だから、おばあちゃんが生きてください。そして、わたしがおとなになつて、きれいなおよめさんになるすがたを見てください。そして、おばあちゃんのためにかたたきもします。ごちそうもしてあげます。わたしのことがわからなくてもいいんです。これからもずっとわたしのたいせつなおばあちゃんです。

## 佳作 かい星

福岡県  
福岡市立東月隈小学校二年

伊藤 瑠星

ぼくは、ふた子のおとうとです。ふた子のおにいちゃんは、かい星です。かい星と一しよにうまれてとてもよかつたと思います。

まい日、ごはんもおふろもねるのも一しよです。かい星がいるから、なんでも二ばいたのしいです。

おもちゃも、一人一こずつ買ったから、こうかんしてあそべるし、友だちも二ばいできるし、おもしろくなるのも二ばいです。

でも、二人でいるから、大きわざして二ばいうるさくなります。だから、おかあさんにおこられるのも二ばい強れつです。

前に、ぼくが入いんしたとき、はじめてはなればなれになりました。かい星がいなからたいくつで、何回もおかあさんに、

「早くおうちにかえりたい。」

と言つてこまらせました。たいいんしたとき、かい星がニコニコがおで、

「おかえり。」  
と言つてくれて、ぼくはホツとして、あたたかい気もち

になりました。

だげどときどき、かい星は、ぼくのライバルになります。うんどう会の前は、どつちが足がはやいかきようそうします。いつもぼくがまけるからくやしいです。かい星は字がきれいです。ぼくは、まけないようにいっばいれんしゅうするけど、なかなかきれいに書けません。でも、あんぎんではまけません。ぼくが、あんぎんけんていニきゅうにごうかくしたとき、

「りゅう星すごい。」  
と言つて、じぶんのことのようによくんでくれました。

ぼくは、かい星にまけたとき、くやしくて「かい星、ぜんぜんすくない。」  
と言うのに、かい星はほめてくれてやさしいなと思いました。

ぼくが、まい日のしく生かつできるのは、いつもとなりにかい星がいるからです。かい星は、ぼくのあいぼうです。いつまでもなかくたすけあつていきたいと思ひます。

かい星いつもありがとう。  
これからもよろしくね。

## さあちゃんのこころ

さあちゃんは、わたしのおじいちゃんです。わたしが、「おじいちゃん」ではなくて、「さあちゃん」と名前だよぶのは、「おじいちゃん」とよぶと、さあちゃんはきつと「年をとってしまつたな。」

と、かなしくなると思うからです。さあちゃんは、やさしくてスポーツマンです。お買物は、いつもマウンテンバイクでひとつ走りです。登山も大すきで、わたしもさあちゃんといつしよに何回もハイキングに行つたことがあります。わたしがようち園生の時、車山に登つて、上りざかをいっしょうけんめい歩いていたら、つかれて気分が悪くなつてしまいましたが、自分でがんばつて登ろうと思いましたが、さあちゃんが

「おんぶしてあげよう。」

と言つておんぶしてくれました。楽しんで、すぐに気分が悪いのもなおつてしまいました。さい後はさあちゃんと手をつないで、自分の足で登り切りました。そこにまっていたのは、お花がたくさんさいている草原を、遠くまで見たたせるおかでした。さあちゃんといつしよに、そうもきょうでけしきを見ながら、遠く山や鳥の名前を覚えてもらいました。

夏休みや冬休み、春休みの間は、かならずさあちゃんのおうちにとまりに行きます。そうするとさあちゃんは、しゆく題のお手つたいをしてくれます。漢字書きとりの問題を出してくれたり、分からない問題を教えてくれたりします。

「こんなかんたんなのもできないの。」

と言いながら、やさしく、でもちよつとこわい顔で教えてくれます。べん強の時間がおわると、おん水プールにつれて行つてくれます。さあちゃんのおうちは海に近いので、つりにもつれて行つてくれます。わたしがはじめてつりにした時に、さあちゃんはつりのしかたを教えてくれて、はりにえさをつけてくれました。海に向かってはりを投げから、クルクルとリールをまくと魚がつれると教えてくれました。わたしもちよつとせんしました。すると、さあちゃんの言つたとおり、とらふぐの赤ちゃんがつれました。この前の春休みまでは、こんなふうに乗しかつたのに、今、さあちゃんは重いびよう気で二日中ベッドの上ですごすことになつてしまいました。今も夏休みでさあちゃんのおうちにあそびに来ているけれど、漢字の問題は出してもらえません。さあちゃんのつらそうな顔を見ると、なんだかわたしも元気がなくなつてきます。でも、さあちゃんのために、わたしはえ顔でベッドに行つて、さあちゃんとたくさんお話ししたり、いっしょにごはんを食べたり、さあちゃんのお話したり、いっしょにごはんを食べたりしています。さあちゃん、今まで色々な事を教えてくれて、ありがとうございます。これからは、わたしがお返しをする番です。さあちゃんのお手つたいをたくさんするので、早く元気になつてね。

## ぼくの兄弟ありがとう

ぼくは三人兄弟の二番目で、五年生の、お兄ちゃんと、ようち園年少組の四才の弟がいます。男同しだから、いっしょに遊んだり、話ももり上がつて楽しいけれど、三人でいると、毎日のようにけんかをしています。兄ちゃんとは、えんびつやけしグムのかし合いやいろんなきようそつでけんかになつてしまいます。弟は、めつちやくちやかわいくておもしろいけどぼくのしていることをじ分もしいからとり合いになつたりじゃまをしてきたりしてけんかになつてしまいます。今年の5月にお兄ちゃんが宿はく学習で二ばくしました。学校から五年生がいなくなるとさみしくて、家に帰つても兄ちゃんが帰つてこないから、ぜんぜんもり上がらなくていつもだつたらお母ちゃんに

「ちよつとしづかにしてよ!!」としかれるのに、

「今日は、どしたん?おとなしいな」といわれるくらい弟としづかに遊んだりしていました。夜ごはんも、いつもよりなんか楽しくなくてしづかに食べていました。お父ちゃんが

「どうしたん昂樹がおらんかったら元気ないやん。いつもけんかかしたるくせに。」とわらつて言いました。ぼくは、なんかてれてしまつたけど、

「やっぱり昂樹がおらんとパワーが出んわー。」と言いました。いない間、今ごろ何しよんかなとごはん何食べたかなととか、いつもだつたら考えないのにお兄ちゃんのことばかり考えてしまいました。夜ねる時も考えながらねました。次の日もいつもだつたら一しよに学校に行つていたのに、ぼく一人で行つて心ぼそい気持ちになりました。だけど今日は帰つてくると思つたらちよつとだけ元気が出ました。

学校から帰つてどうとう会えました。ぼくは、ものすこくうれしくてたまりませんでした。元気に昂樹がぼくに

「ただいま」と言つてぼくは昂樹に

「やつと帰つたーおかえり」と言いました。だけどなんかてれてしまいました。たくさん宿はく学習の話をしてくれて、ぼくも弟もみんなでもり上がつて、ごはんもめちやめちやおいしくておかわりをしました。昂樹がお兄ちゃんでもよかつたーと思えました。分からないことをいろいろと教えてくれたり、おもしろいことを言つてくれたり、ぼくや弟のめんどう見てくれたり、だからぼくの弟兄ちゃんにありがとうといいたいです。

「こうき、いつもありがとう。」

「ひさ、いつも楽しい歌を歌つてくれてありがとう。」

## おかえり

香川県  
丸亀市立垂水小学校 四年

高田 野乃夏

今年の三月に東北地方を中心に大地震が発生し、それにとまなう津波やよしんによって大きなひがいができました。毎日のようにその様子がテレビで放送され、その中で消防士の人たちがにげおくれた人をきゅう助しに行ったり、人ががいのある放しやせい物しつがもれている原子力発電所に入って活動しているのを見て、むねが「ドキドキ」しているのを感じました。

なぜかという、わたしのお父さんは消防士で、お父さんも「こんなに大きいさいがいが起きると同じような活動をするのかな。」と思い、不安になったからです。わたしはお父さんに、

「パパもこんなきけんな場所にいくん。」  
と聞くと、

「さいがいに大きいも小さいもないんだよ。人がこまっている所に助けに行くことが仕事だから、きけんな場所にも行かなくてはいけないこともあるよ。」  
と答えてくれました。

お父さんは、仕事に行くと、帰ってくるのは次の日の朝です。その時わたしは、すでに学校に行っているの、お父さんに会えるのは学校から帰ってきた時です。だ

から一日い上会うことができせん。家や学校にいる時に地しんが起きたり、サイレンの音が聞こえたと「パパ、大丈夫かな。げん場に行つてけがしてないかな。」と心配になります。

いつもわたしが学校から帰つてくると、  
「おかえり。」

と笑顔でむえてくれるお父さん。わたしは  
「ただいま。」

と言います。それが当たり前のように思っていたけれど、お父さんが仕事からぶ事に帰つてきていることがこんなにもうれしくて、安心することなんだと気づきました。これからは「ただいま。」と言うだけではなくぶ事に帰つてきてくれてありがとうという気持ちをもめて

「ただいま。パパもおかえり。」  
というようにしよう。

これからも仕事でけがをしないようにして元気に帰つてきてね。わたしも、  
「おかえり。」  
と笑顔でむかえるね。

佳作  
「大好きなお父さん」千葉県  
館山市立館山小学校 四年

平野 寿晃

ぼくのお父さんは、自衛隊のヘリコプターのパイロットです。今お父さんの乗っているヘリコプターは、UH-60jです。上が白色で下がオレンジ色のかっこいいヘリコプターです。

救なんヘリコプターで、よく夜中に電話がかかってきて仕事場に行きヘリコプターに乗って病気の人たちを病院のヘリポートまで運びます。他にも海でそうなんした人たちを助けたりします。

三月十一日の東日本大震災のはげんでやく一ヶ月間青森県に行つて、そこから福島県や岩手県でそうさくに行きました。ぼくは、テレビのニュースで自衛隊の人たちががんばっているなあと分かりました。その中でお父さんもすぐがんばっているのだなあと思いました。お父さんが青森県から帰つてきてほつとしました。

お父さんの休みの日にたまにお父さんの乗っているヘリコプターを見せてくれます。いろいろ説明をしてくれるけどぼくはヘリコプターを前にしたらそれどころではなく乗りたい気持ちがいっぱいです。お父さんの仕事場にもよく連れて行つてくれます。パソコンがいっぱいあって大きな地図がありヘリコプターのルートが書いてあったりしてお父さんはすごい所で働いているのだなあと思いました。

ぼくは一回だけシミュレーションをやった事があります。そ

うさをする機械がいっぱいあるので1つ1つおぼえるのが大変だなあと思いました。

本物のUH-60jにも乗ったことがあります。お父さんのそうじゅうをしているヘリコプターには乗れません。なぜなら家族はいっしょに乗れないからです。いつかいっしょに乗る時はお父さんといっしょにそうじゅうする時です。

お父さんが休みの時は少ないですが休みの時はおもいきり遊んでくれます。

ぼくが一番楽しい時は、お風呂に一緒にはいつている時です。男二人でいろんな話をしたりお湯のかけあいをしたりせ中をながしたりします。お湯のかけあいをしているとお母さんに、おこられますがお父さんと2人でわらつてごまかします。そしてまたかけあいをしてまたおこられてのくりかえしです。でもそれが楽しくてやめられません。

よくお父さんがかみを切りに行く時にぼくも一緒に行きます。お父さんはすぐこごだわりがあつていつも同じ人にかみを切つてもらつていてぼくもいつも同じ人によつてもらいます。ぼくにもごだわりがあつてもみ上げは自然にしてと言っています。

ぼくはお父さんのようにヘリコプターのUH-60jのパイロットになりたいです。そしてお父さんの事をほこりに思っています。

佳作

## ジャンボおにぎりの不思議な力

香川県  
高松市立古高松南小学校 四年

平木 優里

私は、お父さんの作ってくれたお弁当が大好きだ。ふだんは料理なんかせんせんしないけれど、家族で公園や動物園に出かけるとき、うちではお父さんがはりきってお弁当を作ってくれる。

お父さんのお弁当は、なんといってもおにぎりが主役。お父さんのごごつした大きな手で作ったおにぎりは、私の顔と同じくらい大きな大きさがある。それが、大きなお弁当箱の真ん中にドーンといすわっている。おかずは、すみっことほんの少しだけ。でもそんなお父さん弁当が、家族みんなのお気に入りだ。

おにぎりの中身は、梅干し・こんぶ・かつお・ふりかけ・めんたいこなど、いろんな具ざいがちらばって入っている。大きなので全面まかれてるので、外から見てもどこに何が入っているかは分からない。それは食べてからのお楽しみだ。

広いしばふの上で、家族みんなでお弁当をかこむのはすごく気持ちいい。主役のジャンボおにぎりは、みんなで少しずつ分けて食べる。何の具が出てくるか。このときどき感がたまらない。

時には具のないところもあって、妹が、「わーん、具が入ってない。」

と半べそをかいたりする。そんな時お父さんは、「はっはっはー、そこは『はずれ』だぞー。」  
と、いたずらっぽく笑う。そしてお母さんも笑いながら、妹に具を分けてあげていた。ジャンボおにぎりは、みんなが楽しみながら食べられるところがいいなあと思う。

この前は、私が食べたおにぎりに梅干しのかたまりが入っていて、すっぱくてたまらずせきこんでしまった。そんな様子を見ていた妹がきやっきやと笑った。いつもならはらが立ってけんかになってしまいそうだけれど、なぜかわいいた妹の笑顔を見て、  
（お父さん、やっぱりするこいな。みんなを笑顔にできるんだ。かっこいいー。）

とうれしい気持ちになった。だから私も思いつき家族と笑って、また口いっぱいにおにぎりをほおぼった。お父さんは「ころんとねころがったまま、ニコニコ笑っていた。お父さんのおにぎりは、家族みんなを笑顔にする不思議なパワーがあるんだと思う。」

お父さん、仕事でつかれているのに、私たちにお弁当を作ってくれてありがとう。これからも家族で出かける時には、やっぱりお父さんのおにぎりが食べたいよ。これからは私も、お弁当作り手伝おうかな。

そしていつか私も、お父さんのようにみんなを笑顔にできるお弁当を作れるようになりたいです。

佳作

## 「おやじの味」(いつもありがとう)

大阪府  
大阪市立開平小学校 五年

岡田 賢心

みんな大人になったらおふくろの味を思い出すと言いますが、ぼくが思い出すのはきつとおやじの味でしょう。

ぼくの両親は二人とも仕事を持っています、食事を作るのはいつもお父さんです。ぼくのお父さんは中国出身

で、中国では夫婦とも仕事を持っているので、家に帰ってから体力のある男の人が食事を作るのはめずらしくありません。お父さんも自分のお父さんが料理をするのを見て自然に身につけたようです。

お父さんは、色々な料理を作れますが、ぼくが一番好きな料理は餃子です。小麦粉をねって皮から作ります。ぼくは、四才の時から餃子作りを手伝っています。

はじめは、皮を丸く作ることや、中のあんがでないように中の部分を厚くするなどのことがむずかしかったけど、今はだいぶできるようになりました。苦勞して作った餃子はすごくおいしいです。

お父さんが作った料理を食べて、ぼくはもうお母さんよりも背が高くなりました。

お父さん、いつもおいしい料理を作ってくれてありがとう。ぼくも大きくなったら、お父さんのように仕事をしながら、家族のために料理を作れるようになります。そしてお父さんのおやじの味を伝えていきたいです。

佳作

## おじいちゃんの事故で気づいた事

岡山県  
倉敷市立庄小学校 五年

金村 理央

「ブルブルルーブルブルル」  
真夜中に、とつ然電話が鳴りました。  
「だれから？ どうしたん？」  
私は、何か大変な事が起きたのかもしれないと、聞いてみました。

「おばあちゃんからよ。おじいちゃんが事故にあつてね、これから、新見の病院へ行くよ。」  
とお母さんが言いました。私のむねが、急にぎゅうと痛くなりました。急いで服を着がえると、お父さんの運転する車で、新見へ向かいました。

おじいちゃん、大好きなつりをするために、日本海へ行く中だった事、まだ、どんなげがをしているかわからないという事などを、おばあちゃんが教えてくれました。

私は、もしも、おじいちゃんが死んでしまつたらどうしようと思うと、むねがつぶされてしまふぞうでした。そして、「おじいちゃんが無事でいてくれますように。」と心の中でお祈りしながら、おじいちゃんの事を思い出していました。

春には、よく二人で山登りに行く事。頂上で、おじいちゃんと一緒に食べるおにぎりはとてもおいしいです。

それから、色々な野菜を畑で作つて、私たちに届けてくれる事。特に夏には、私が大好きなすいかや、甘いとうもろこしをたくさんくれるので、とても楽しみにしています。

秋には、一緒にさつまいもほりをする事。おじいちゃんの畑の土は、とても固いから、最初におじいちゃんが、大きなスコップで、土をほりおこしてくれました。その後で私が、いもをきずつけないように、ていねいにほり出します。中には、私の顔と同じくらいのものもあって、本当にびっくりします。

他にも、色々な植物の名前を覚えてくれたり、昔話をしてくれるおじいちゃんの事をたくさん思い出している間に、病院へ着きました。

おじいちゃんの顔とうでは、ガーゼがはられ、固まつた血がいっぱいついていました。でも、本当に大きな事故だったけれど、おじいちゃんは無事でした。私のカチカチになっていた体がくじやーと、やわらかくなつてきました。おじいちゃんは、「理央に魚を食べさせたかったけど、ごめん。」

と言いました。おじいちゃんは、こんなに痛くて、しんどくても、私の事を考えてくれていてと思うと、泣きたくなくなりました。

そして、いつも私にしてくれている事も、おじいちゃんが事故にあわなかつたら、当たり前で、気づかなかつたかもしれません。

おじいちゃん、ありがとう。今度は、畑の草取りや水やりのお手伝いもしようと思います。もつとたくさん会いに行きます。

だから、安心して、早く元気になつてね。

佳作

## 白いうわぐつ

香川県

観音寺市立観音寺東小学校 五年

細川 夕佳里

「月曜は、まっ白」私は、下足箱でくつをはきかえながらつぶやいた。私のうわぐつは月曜日はまっ白です。金曜日に持つて帰ってくるうわぐつは、土曜日の間にじいちゃんがきれいに洗つてくれるからです。

まっ白のうわぐつはちよつと気の重い月曜日の気持ちをひきしめてくれます。

そして私は、まっ白のうわぐつをはいて教室へ入ります。いつものように学校から帰るとお母さんに「たまには自分のうわぐつは自分で洗いなさい」と言われた。

「だつてうわぐつは、じいちゃんが洗ってくれるのに」私の口はちよつと、とんがった。その口をお母さんは見のがさず、ジロツと私を見た。私は、しぶしぶうわぐつを持つて庭に出た。バケツに水をはって洗剤をブラシにつけて洗つてみた。「うくんあんまり落ちんなあ」私は、もつと洗剤をつけてゴシゴシ洗つた。「まあ、これでいいか」とうわぐつをすすいで陽の当たる場所に干した。

次の日、かわいたうわぐつを見るときれいになっているよくな、なつてないよくな……ところどころ、汚れが落ちていない。「じいちゃんが洗つてくれるうわぐつは、まっ白のにな……」

と思いながら、げんかんに入った。そしてふと目を下にやると、じいちゃんのぞうりが目に入った。

「じいちゃんのぞうりもドロドロやなあ」と思った。じいちゃんは庭で野菜を作っているの、ぞうりに畑の泥がいっぱいついていた。私は、じいちゃんのぞうりも洗つてみようと思った。昨日のようにバケツを出して、ぞうりを水につけた。じいちゃんの喜ぶ顔を思い浮かべながら自分のうわぐつより時間をかけて洗つた。「うん。きれいになった」じいちゃんのぞうりを太陽の光に当てた。

ぞうりは、太陽の光が反射しキラキラして私ほうれしくなつた。そして私は、また陽の当たる場所にぞうりを干した。

次の日、じいちゃんがぞうりをさがしていた。私は外に干してあるぞうりを走つて取りに行き、じいちゃんに差し出した。じいちゃんは「ゆかりが洗つてくれたんか」と言った。

私は「うん」と言った。私はちよつとはずかしくなつた。じいちゃんは「ありがとう」と言つてくれた。私もじいちゃんに「いつもありがとう」と言った。

じいちゃんの目は細くなつた。私の目も細くなつた。

佳作

## お父さんありがとう

三月十一日午後十四時四十六分はく達は、ちようど学校で帰りの支度をしていました。突然教室がカタカタとゆれ出し、「あつ地震だ」

と誰かが叫びました。ぼくはすぐおさまるだろうと思った矢先、今までに経験した事もない大きなゆれで立っている事さえこんなになりました。その時先生が、

「落ち着いて、これから校庭に避難します。」と言ったので、頭を守りながら校庭に避難しました。ほつとしたとたん、さつきよりさらに大きな地震がおそいました。校舎自体揺れ出し、怖くて泣き出す子も大勢いました。その後、班長のおじさんが車で迎えに来てくれたので一緒に乗せてもらって家まで帰ってきました。外は、朝見た風景とは全く違っていました。家に着いてさらに地震の怖さを知る事に。弟は家を見て泣いてしまいました。その時お父さんが心配して会社から戻って来てくれました。ぼく達にかけよってきて、「大丈夫か？ けがないか？」

と言つてギョッと抱きしめてくれたので、すごく安心しました。すぐ後にお母さんも会社から帰ってきて、泣いている弟をなだめて家の中の様子を見に行きました。その時電気も水も止まっていた事に初めて気がきました。

この二大事に、お父さんの趣味がわが家を救つたのです。その日からキャンプ生活の始まりです。ご飯はお父さんがハン

山形県  
鶴岡市立朝陽第六小学校 五年

大槻 優斗

ゴウで炊き、ゆいいつガスは使えたので、冷蔵庫の中の傷みそうな物から順番にお母さんがおかずを作ってくれました。暗くなつたらお父さんがランタンを焚いて部屋を明るくしてくれて、夜は冷えるので服を何枚も重ね着し背中にもホッカイロをはき、湯たんぽを抱いて寝ました。しかし、折角寝付いても余震の度に何度も起きるので毎日寝不足でした。

学校もお父さんの仕事も休みになり日中は落ちた瓦の片付けや水くみのお手伝いをしました。情報はラジオのみで、津波で多くの犠牲者が出た事や原発事故についても何日後に知りました。その後、風に流され高い放射能が上空に迫っている事を知り、ぼく達を守るため、お父さんの決断ですぐ山形に避難しました。避難して二週間後に学校が始まると連絡がきたので一旦は福島に戻りましたが、原発問題が解決しないので、お父さんから、「安心して住めるまで、山形に行つて思いっきり遊んで来い。」と言つて引越しを決めてくれました。

本当は、お父さんと離れて暮らすことや、仲の良い友達と離れるのは嫌だつたけど、こつちに来たら友達も沢山出て来て、外で思い切り遊べるようになったよ。週末の度に会いに来てくれてぼく達はすごくうれいけれど、無理しないでね。どんな時もぼく達を一番に守ってくれるお父さん本当にありがとう。

佳作

## ぼくのお父さん

ぼくのお父さんは、ぼく達が住んでいる群馬県嬭恋村でキャベツ農家をしています。嬭恋村は、七月から十月の夏秋キャベツの生産量が全国トップの村です。

毎日、午前二時に起きて、ぼくがねている間に仕事へ出かけます。六月から十月の間は、午前三時ごろからキャベツを一個ずつ包丁で切り取り、箱につめて出荷しています。その他にも畑を耕したり、消毒や除草など夜おそくまで働いています。キャベツ一個作るにもたくさん作業があつて、大変な仕事だと思いました。毎日夜中から仕事をしているので、つかれているだろうなと思います。前かがみになってキャベツを切るの、時どきこしも痛いようです。そして、お父さんのうでは、筋肉がいつぱいでとても力強そうに見えます。それだけキャベツを作るという仕事は力仕事なんだと思いました。

お父さんが仕事から帰ってくると、とてもくさいです。それは、あせのにおいや土のにおい、キャベツのにおいが全部混ざつたくさいにおいです。でも、くさいけれど一生けん命頑張つてくれているにおいだから、ぼくはその

群馬県

嬭恋村立西小学校 六年

黒岩 穰

においが大好きです。

そして、ぼくはお父さんが一生けん命作ったキャベツは、世界一おいしい最高のキャベツだと思います。

今の時期お父さんは、仕事がいそがしくておやすみがありません。ご飯もいっしょに食べられないことが多いです。ちよつとさみしいなと思うことがあります。でも、少し休みの時間があると、お父さんはつかれているはずなのにぼくと遊んでくれたり、勉強で分からないところを教えてくださいます。それからお料理を作るのも上手です。時どきおいしい料理を作ってくれます。そしてお父さんはいつもじょうだんばかり言つて家族を笑わせてくれます。だからぼくはお父さんといると楽しいです。

いつもはずかしくてなかなか感謝の気持ちを伝える事ができません。だけど、心の中では「お父さんありがとう、お父さんお仕事頑張つてね。」といつも思っています。今年の取かきが終わつたら、直接言ってみようかなと思います。

お父さん、これからも健康に気をつけて頑張つてね。



## 「ありがとう」

ほくには、98才の曾祖母がいる。今は祖母と二人で暮らしている。時々、祖母の家に遊びに行く。祖母が、曾祖母の身のまわりの世話をしあけるたびに、「ありがとう。」と言っている。

とにかく、一日に何度も言う。足腰が弱いのでソファから立ち上がる時に手をかしてあげた時、トイレまで連れていってあげた時、食事を運んでいった時、洋服を着がえさせてあげた時、数えきれないくらい「ありがとう。」という。その「ありがとう」という時には必ず、両手をあわせて軽く頭を下げながら言う。とても、ていねいで気持ちのこもったあいさつに見える。

曾祖母は、週に4日間、デイサービスに行っている。デイサービスに行くようになってから、特に「ありがとう。」と言う回数が増えたと祖母が言っていた。

曾祖母が、介護士の人たちにいかにも多くのお世話になっているのがよくわかる。そのたびに手をあわせて「ありがとう。」と言っているにちがいない。

大阪府  
大阪市立海老江東小学校六年

濱田 祐瑛

ほくは、そうめんが大好きだ。夏中、毎日のように冷やしそうめんを食べている。食べているほくは、涼しいけれど、つくっているお母さんは汗だくになっている。

ある日、お母さんが  
「ちょっとこっちにきてもらん。」

と言いながら台所から手まねきした。ふつとしているおなべの前に立つと下から熱風がくるみたいですよ。暑い。そんなところで、ごはんをつくっているのだから、少し苦手なものがでも、食べなきゃと思った。

毎日、ごはんを食べ、学校へ行き、勉強して、友達と遊ぶ、ふつとすることができるにも感謝の気持ちがたいせつというのを曾祖母の「ありがとう。」で気がついた。

「ありがとう。」という言葉は、人と人をつなぐかけ橋のよきな言葉だ。ちよつとしたことにも「ありがとう。」と言えたら、言われた方も、言った方もすこい気持ちになれる。

手をあわせる曾祖母のようにいつも、感謝の気持ちを忘れずにいたいと思った。

## お父さん、特にありがとう

お父さんがおまわりさんだということをほくが知ったのは、ほくが二年生の時でした。

家族で遊園地に行った時、近くにいたお年寄りが気分が悪くなつて倒れてしまい、お父さんは救急車を呼んだり、お年寄りの脈を計ったりとてもテキパキしていたので、かっこいいなあと、お母さんに言ったら、お母さんから、お父さんは実はおまわりさんだから、こんな時はかっこいいねんで、と教えてもらい、ほくはびっくりしました。お父さんは日曜日も仕事だと言つて出ていくし、家では仕事の話はしないので、正直なところ、まさか自分のお父さんがテレビドラマに出てくる刑事やパトカーに関係している仕事をしているとは全く思いませんでした。お父さんは朝はまだほくと妹が寝ている時に仕事に行くし、帰りはいつも遅いです。だけど休みの日には、看護士さんをしているお母さんの代わりに、おいしい手料理を作ってくれます。その中でもハンバーグが得意料理で、公園でも妹と三人でサッカーをしてくれます。だけど、ほくと妹が人に迷わくをかけた時、あいさつをしないと怒られます。そんなお父さんが5月のゴールデンウィークが終わったころ、ほくを呼んで、「お父さんは、地震で大変な東北に行くから、ちゃんとお母さんの言う事をきいて下さい。たのむで。」と言いました。東北の地震のことはほくもテレビに何回も映しだ

寝屋川市立田井小学校六年

本田 唯法

される津波を見ていたので知っていました。まっさきにはほくが考えたのはまだ余震があるので、大丈夫？と言つと、お父さんは「大丈夫やで。東北は大変やからな。これをコクナンと言ふんやで。」と言っていました。

それからお父さんは一ヶ月くらい東北の宮城県に行きました。その間、ほくと妹はお母さんに怒られることもあったけど、せんとく物をたんだり、お使いをして家族で助け合いをしました。お父さんが東北に行っていることを、僕の担任の先生にも言ったところ、本田くんのお父さん、大変やねえ、えらいねえと言われてほくも本当にお父さんは大変だけれど、えらい人だなあと思いました。

一ヶ月くらいたつて、お父さんが帰ってきました。少しつかれた顔をしていましたが、お父さんは東北限定の牛タンのお茶づけを、おみやげに買ってきてくれました。ほくと妹はお茶づけが大好きなので食べると、とてもおいしかったです。ほくと妹がお茶づけを食べるのを見て、お父さんもうれしそうでした。

東北のコクナンだけではなく、日本のコクナンを助けに行つたほくのお父さんは大変な仕事だったと思えました。だからいつも父の日には、ありがとうと言っています。今回はこの作文で、次のありがとうを伝えたいと思います。

お父さん。特にありがとう。

## 選者あとがき

### あさのあつこ「作家」

今年（ことし）は震災があつたせいでしようか、お父さんの復権が目覚ましいように感じました。震災の記録という視点に立つと、今回の応募作品は子ども達が震災が起こった時、何をしてどんなことを感じたのか、「子どもの側から見た記録」として非常に貴重なものだと思います。また、子どもの母親への思いをテーマにした作品もあり、私も子育てを経験した「母親」として励まされました。このコンクールの作品からは読むたびにパワーをもらっています。今回も幸せな経験をありがとうございます。

### 尼子 騷兵衛「漫画家」

作品にいろいろなバリエーションもあつて、私のマンガのキャラクターとして使えるような人物がいたり、エピソードも笑えて・泣けて・また笑えてとストーリーとしてきちんと成立するものがあつたり、漫画家として勉強になりました。このように、ワクワクする文章を書けるのは本人の才能ももちろんですが、尊敬できるお父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃん・兄弟姉妹がいてこそです。家族がいるからこそ、読み物としても優れたものに仕上がったのではないでしようか。

### 森田 正光「気象予報士」

今年も読み進むうちに、どんどん文章に引き込まれました。私の会社の同僚に読ま

せてみたところ、感動で目に涙をためる人間もいました。寄せられた作品に書かれていることは全てノンフィクションです。是非、たくさん大人の大人に読んでもらって感動を共有したいですね。

### 鈴木 弘行「シナネン株式会社代表取締役社長」

今年（ことし）は震災があつて、家族の絆が見直され、改めてその大切さを確認した年だったのではないでしようか。子ども達やそのご家族に、コンクールへの参加を通じて家族への感謝の気持ちを再認識していただくよい機会になればと思っています。どの作品も質が高く、愛情と絆と感動にあふれていて、選ぶのに苦心しました。

### 下高原 拓「朝日小学生新聞」

東日本大震災があつて、子ども達がこのコンクールに取り組んでくれるかどうか不安に思っていました。今年も三万点を超えるたくさん作品を寄せてもらいました。作文を読んでいると、震災への対応で家を離れて仕事を家族の心配をしたり、学校行事が中止になったりするなど、不自由な生活の中でも、元気に学校にかよっている子ども達の姿が目に浮かびました。

（順不同、敬称略）